

原 著

スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響： その研究動向と今後の方向性

久崎孝浩・石山貴章¹⁾

Influences of parents and coaches on the psychological development of children
participating in sport activity: Past and future trends

Takahiro Hisazaki & Takaaki Ishiyama

本研究では、スポーツに参加する子どもを取り巻く親や指導者が子どもの心理的発達に及ぼす影響について先行研究を概覧・評価した。まず、子どものスポーツ参加に対する親や指導者の行動や信念の影響に関係する理論を幾つか呈示し、それぞれの理論が主張する仮説を説明した。次に、各理論に沿って知見をレビューし、大人の肯定的な行動や認知がスポーツに対する有能感や価値に対する子どもの知覚を高め、さらにそれが内発的動機づけやスポーツ活動の決定意志を維持したり高めたりするというプロセスが存在する可能性を示唆した。しかしこのレビューを通して、親や指導者の行動や子どもの有能さについて親（または指導者）の見方と子どもの見方が一致しないということが見出された。またさらに、既往の研究はスポーツ活動に関連した子どもの心理的特性に着目しているものの、多様な状況で一貫して思考・感情・行動に及ぼす子どものパーソナリティの側面に焦点を当てていないことも確認された。こうした2つの問題に対して最後に、この領域の今後の研究の方向性を提示した。

キーワード：子どもスポーツ、大人の影響、子どもの知覚、大人と子どもの不一致、子どものパーソナリティ発達

1. 子どものスポーツ参加の意義とは何か？

財団法人日本体育協会のスポーツ憲章では「スポーツは、人々が楽しみ、よりよく生きるために、自ら行う自由な身体活動である」としているが、一方で、スポーツは闘争や勝敗という要素をも含んでいる。しかし、長い歴史の中でスポーツのあり方は変遷しながらも、人類のみが豊かなスポーツ文化を形成しそこに熱情的に傾倒しているということからすれば、私たちは闘争や勝敗を超えてスポーツ活動・観戦の中に、普遍的なあるいは個人的な意義を見出していることは間違いない。

殊に、子どもを取り巻く社会的・教育的環境は、スポーツは子どものパーソナリティの形成に役立ち、子どもの道徳性を高めるといった意義のもとに、子どもにスポーツを推奨し、組織的にスポーツ活動を統制するきらいがある。確かに、幾

つかの調査で、運動部・スポーツクラブに所属している子どもはそうでない子どもに比べて体力のレベルが高い、運動好きでスポーツを行う人はそうでない人に比べて社交性や適応性が高い、競技成績の高い人は情動的安定性が高い、スポーツ活動を継続している人はスポーツに対する有能感が高いといったことが報告されている。しかし、永井（2004）はこうした調査報告から、スポーツ活動によって体力が増進し、社会的に好ましい性格や自尊心が形成されると考えるのは早計であると指摘している。すなわち、これらの調査報告では、そもそも体力レベルの高い人、あるいは社交性・適応性や情動的安定性が高い人であるから、スポーツを好み、スポーツ団体に所属し、スポーツ活動を継続しているといった因果の方向性が考慮されておらず、またスポーツ環境のあり方や子どもがそのスポーツ環境の中でどのような経験をしてきたかということが無視されているのである。

¹⁾ 就実大学教育学部教育心理学科

それゆえにあらためて、子どものスポーツ参加の意義、あるいは子どもの人格形成や道徳性に及ぼすスポーツの影響を考えると、私たちは子どもを取り巻くスポーツ環境のあり方、あるいは子どもがスポーツ活動の中でどのような経験をしてきたか、スポーツ活動に関係する大人とどのようなやりとりを経験してきたかを見ていく必要がある。

また、子どものスポーツ活動に関する最近の現状として子どもの体力や運動能力の低下が問題視され、体力や運動能力の適切な増進をもたらす子どものスポーツ活動やそのあり方が強く期待される風潮がある。がしかし、子どもの発達的特性を無視した過剰な練習や勝利至上主義的な指導によって身体的・心理的な損傷を負う場合があること（中村，2008）、親や指導者が自分自身の願望や夢を子どものスポーツ活動に託して子どもの成功をもって代理的にその願望や夢を叶えようとする「代理人による達成（achievement by proxy）」に気づかずに過剰な期待あるいは指導や応援をしてしまうこと（Begel, 1999; 永井, 2004; 武田, 2008）、スポーツ選手の燃え尽きや競技離脱などの臨床事例の背後に親や指導者との特異な関係性が認められること（中込, 2004）などが報告されており、子ども時代のスポーツ環境やスポーツ活動に関係した大人とのやりとりの経験や関係性のあり方を慎重に検討することも必要になってきている。

そこで本論文では、特にスポーツに参加する子どもの心理的発達とそこに及ぼす親の働きかけに焦点を当てた国内外の研究成果をレビューし、スポーツに参加する子どもに対する親の影響についてどこまで明らかになっているかを示したい。しかし、スポーツに参加する子どもの心理的発達に大きな影響を及ぼしうる大人は親だけではない。スポーツ活動において子どもに直接的に働きかける指導者の存在も重要であり、特に国外の研究では指導者の影響について盛んに研究が行われている（Horn, 2008）。また、親が子どもに影響を及ぼすメカニズムを審らかにする上で、指導者の影響に関する研究成果が参考になることもあるだろう。そこで、スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす指導者の影響についても本論文ではその研究成果を通覧したい。このようなレビュー

を通して最終的に、まだ明らかにされていない点や方法論上の問題を探り、この領域における今後の研究の方向性を提示することが本論文の目的である。

2. スポーツに参加する子どものいかなる側面に大人は影響を及ぼすか：理論的アプローチ

スポーツに参加する子どもに対する大人の影響をテーマとした研究において、その多くは幾つかの理論を基盤として行われていたり、また結果を理解・説明する際の枠組みとして特定の理論が用いられたりしてきた。そこでまずここでは、スポーツに参加する子どもに対する大人の影響についてそのメカニズムを想定している理論を幾つか提示したい。

（1）コンピテンス動機づけ理論

「コンピテンス動機づけ理論（competence motivation theory）」はHarter（1981, 1999）が提唱する考え方であり、この理論においては、子どもは様々な領域で自分自身の有能さを感じたいという生来的な欲求をもっており、その「有能感（perception of competence）」を経験したり高めたりする目的である領域での達成のために努力をするということが前提視されている。その努力の過程や成果に対する大人の役割が、子どもの有能感などの自己覚知や感情的反応、また動機づけの志向性を発達させるという。そして、子どもの成功や結果ではなくスキル上達や改善に向けて独力で努力することを、大人が認めて随伴的に肯定的なフィードバックをすることで、子どもは有能感や「統制感（perception of control）」、肯定的な感情、内発的動機づけを高めていくと考えられている。スポーツにおける大人の影響を明らかにしようとする研究ではこれまでに、親や指導者の行動が支持的な関わりや励ましといった肯定的なものか、実技・競技に対してプレッシャーを与えたりミスに対して批判したりするような否定的なものかを把握し、その大人の行動やその背後にある信念・期待が子どもの自己覚知・感情的反応・動機づけ、そしてそれに関わる参加継続や撤退とどのように関係するののかについて検討されてきた。

（2）自己決定理論

「自己決定理論（self-determination theory）」は、

スポーツや身体的活動における動機づけを理解する際の枠組みとして近年利用されるようになってきたモデルであり、Deci & Ryan (1985; Ryan & Deci, 2000) によって洗練されてきた。この理論では基本的前提として、人は本質的に、積極的な成熟への志向性を有し、最適な課題を求め、自己自身を拡大させ、自分の素質や能力を自由に適用して新たなスキルを学習・獲得しようとする傾性を備えているとする。そして、社会的環境は、こうした人の本質的な傾性を育むこともあれば、阻害することもあると考える。また、自己決定理論では、人は最適な形で機能しながら発達していく際に満たされるべき重要な基本欲求として、「有能感欲求 (need for competence: 自分自身の行動や社会的環境とのやりとりを効果的なものとして知覚したい欲求)」、「自律性欲求 (need for autonomy: 自分自身の行動や思考は自分の意志で自由に選択できるものであり、自分が行為の主体であると知覚したい欲求)」、「関係への欲求 (need for relatedness: 自分自身は周囲の人とつながりがあり、何かに所属していると知覚したい欲求)」を生来的に備えており、これらの欲求がある特定の社会的環境の中でどの程度満たされるかによってその環境に対する個人の動機づけや行動、発達、心理的な健康が左右されたと考える。一方、これらの欲求を満たさない社会的環境ならば、その環境は個人にとって好ましくない結果をもたらすと考える。特に、個人の内的動機づけ¹に影響を及ぼしうる社会的環境内の出来事は「統制的側面 (controlling aspect)」と「情動的側面 (informational aspect)」を含んでおり、前者は自律性欲求や自分の行動の原因の知覚に関係し、後者は有能感欲求に関係する。具体的には例えば、子どものあるパフォーマンスに対する親からのフィードバックが自分の判断や努力による成果であることを認める (自律性欲求を満たす) 内容のもので、自分の能力を称えている (有能感欲求を満たす) ものであれば、その子どもの内的動機づけは維持される、あるいは高まるということである。このように、社会的環境で生じる出来事の性質が基本的にその後の動機づけを決定すると考えるが、しかし、出来事に関係した個人的要因や文脈的要因が動機づけに及ぼすことも重視されて

いる (Deci & Ryan, 1985)。例えば、ある子どもは、外的な報酬たる褒賞をもらったことで、その褒賞がスポーツを継続してきた目的だと知覚すれば、自分のスポーツ活動や練習は外的に統制されていたのだと認知して、内的動機づけを低下させるかもしれない。しかし、別の子どもは同じく褒賞をもらったことで、その褒賞を自分のスポーツの有能さを証明するものとして知覚するとともに、自分のスポーツ活動や練習は有能さを維持するための努力やスポーツ活動自体の楽しさに支えられていたのだと認知して、内的動機づけを高めるかもしれない。

ただ、スポーツ参加・継続においては純粋な内的動機づけばかりが作用するわけではなく、内的動機づけとは対照的に、ある成果や褒賞を得ようとすることを純粋な動機とする場合もあるだろう。そこで自己決定理論では特に動機づけの分析において、自分自身の行動の原因所在 (locus of causality) や自律性の程度、すなわち自己決定の程度から動機づけを連続体として把握している (Ryan & Deci, 2000)。具体的には、自分の行動の目的が不明確な状態を指す非動機づけ (amotivation) と内的動機づけの間に、自分自身の行動を自分の価値・目標と結びつけて調整している (自己決定の) 程度によって異なる4種の外的動機づけを想定し、自己決定の程度の高い順に「統合的調整 (integrated regulation)」、「同一視的調整 (identified regulation)」、「取り入れ的調整 (introjected regulation)」、「外的調整 (external regulation)」を位置づけている²。より自己決定的な動機づけを備えている個人ほど特定のスポーツを継続しやすく離脱しにくい、またスポーツ参加における肯定的感情が高いことから、自己決定性に基づく連続体として動機づけを捉えることの妥当性は確認されており、近年、当初は外的的にスポーツに参加していた子どもが次第に自己決定的になっていく過程においてどのような出来事や文脈でのどのような親や指導者の働きかけが有効なのかを理解する枠組みとしても期待されている (Weiss & Amorose, 2008)。

以上のように自己決定理論では、社会的環境の中で生じる出来事に対する認知のあり方によって、どの程度有能感欲求や自律性欲求が満たされるか、

また自分の行動がどの程度自分の意思で自由に選択・制御されるか（自己決定の程度）が左右され、それに呼応してその後の動機づけのタイプが決まってくるとみている。したがって、この理論を基盤としたスポーツにおける大人の影響に関する研究においては、指導者のフィードバックの質や量が子どもや選手の動機づけにどのように影響するかという点に意が注がれている。

（3）達成目標理論

ある種の達成に対して個人は、事前に成功や失敗を定義したりある特定の動機づけを形成したり、あるいは達成に対して多様な感情的反応を示したりすることで、その後の動機づけや行動を複雑に変容させる。このような複雑な達成状況に対して個人がどのように意味づけしたり反応したりするのかを理解する際には、その達成状況において個人がどのような達成目標を抱いているかに注目することがまず有効かもしれない。そのような考え方を背景とするアプローチが「達成目標理論（achievement goal theory）」である（Ames, 1992; Dweck, 1999; Nicholls, 1989）。この理論ではスポーツ活動も達成状況の1つとして考え、どのような達成目標が存在するかということを検討するのも重要であるが、それだけでなく、その達成目標が発展したり取り入れられたりするメカニズムや、その達成目標の発展や取り入れがその後の子どもや選手の参加状況・パフォーマンス・心理的健康などに及ぼす影響メカニズムが探求されてきた。また、この理論においては、達成行動を動機づける源泉は「自分の能力に対する内的な感覚（有能感：competence）」にあるとし、有能感を高めたり有能さを発揮したりすることが達成行動の最たる動機づけであると仮定している（Nicholls, 1989）。ただし、自分の能力をどのように発揮したり評価したりするのかによって達成目標は質的に異なってくるわけであり、特に Nicholls (1989) は、あるスキルを獲得したり課題を解決したりして自己参照的な学習・改善がなされることで達成感や有能さを感じる個人は「課題関与的（task-involved）」であるとし、さほど努力することなく他者と同等のあるいはそれ以上のパフォーマンスを発揮することで自分の有能さを感じる個人は「自我関与的

（ego-involved）」であるとした。このように2つの異なる目標が存在し、発達とともに達成目標の志向性が課題関与的になるか自我関与的になるかは個人によって異なってくる。児童期の終わり頃には能力という概念から分離して努力という概念を理解するようになり、懸命な努力をしても達成感や有能感を感じないこともあることに気づき始める（Fry, 2001）が、そのような児童期以降の社会化の経験は達成目標の志向性に個人差を生み出すであろう。実際、「課題志向性（task goal orientation）」の高い人はスポーツや教育を個人の成長や達成の機会と捉え、成功は懸命な練習や学習あるいは他者との協同によって生まれるという信念をもつ傾向があり、一方の「自我志向性（ego goal orientation）」の高い人はスポーツや教育を社会的地位・優位性・経済力を高める機会と捉え、成功は欺瞞や非合法的な方略を駆使してでもパフォーマンスで他者を凌ぐことで生まれるという信念をもつ傾向があり（Duda, 1989; Duda & Nicholls, 1992）、目標志向性の個人差としての課題志向性と自我志向性には大きな違いがある。

こうした目標志向性の個人差はある達成状況における経験の個人的な意味づけに大きく影響してくるであろうが、やはり親や指導者が強調する目標構造などによって生み出される社会的状況、すなわち Ames (1992) が言うところの「動機づけ雰囲気（motivational climate）」の影響も大きいであろう。スポーツにおける大人の影響について達成目標理論を基盤とした研究では主に、親や指導者の目標志向性、あるいはそれらが関与した動機づけ雰囲気に焦点が当てられてきた。

（4）期待－価値理論

「期待－価値理論（expectancy-value theory）」は Atkinson (1957) に始まる、ある種の達成における選択や行動を多次的に捉えようとする理論である。ある特定の領域で同じ能力レベルであるのに、なぜ、ある子どもたちは成功することに自信をもち達成したいという思いを強くし、他方の子どもたちは自信をもてずにその領域から撤退しようとするのか。そうした動機づけの個人差の問題を、この理論では「成功への期待（expectancy for success）」や「有能さへの信念（competence belief）」、および達成における

「課題の主観的な価値や重要性 (subjective task value or importance)」の観点から理解しようとする (Eccles & Harold, 1991; Eccles, Wigfield, & Schiefele, 1998)。すなわち、ある領域において成功を期待しなかったり自分の能力を低く認知したりする子ども、またはある活動が自分のアイデンティティに関係ない (「達成的価値 (attainment value)」が低い)、楽しくない (「興味的価値 (interest value)」が低い)、目標到達しても役立たない (「有用的価値 (utility value)」が低い)、時間的・精神的・経済的なコストがかかるとしてその活動の重要性を低くみる子どもは、その活動に参加しなくなったり、困難な課題に取り組むのを諦めたり、スキル獲得のために努力しなくなったりすると考えるのである。そして、子どもの成功への期待や課題への主観的価値、またそれらに関連した達成行動に、パフォーマンスに対する能力評価や成功することの重要性を伝達する親が大きく働いているとみる。Eccles ら (Eccles et al., 1998; Fredricks & Eccles, 2004) によれば、親は、「経験の提供者 (provider of experience: 子どもをスポーツに参加させたり、練習や試合を組んでその場所まで子どもを連れて行ったりする)」、「経験の解釈者 (interpreter of experience: 子どもの成功に対する期待を伝達したり、評価的なフィードバックを送ったり、そのスポーツの重要性に対する信念を表明したりする)」、「模範者 (role model: 有能さへの信念や特定スポーツの重要性などを子どもが学びとっていく上で観察の対象となる親の行動)」として、子どもの成功への期待や課題への主観的価値、また達成行動に影響を及ぼすという。こうしたメカニズムを仮定する期待-価値理論のもとで、スポーツにおける子どもの自己覚知、価値・信念、参加の選択に及ぼす親の期待・信念や行動がこれまでに検討されてきた。

(5) スポーツ傾倒モデル

スポーツ参加の動機づけを引き起こす中核にスポーツにおける「楽しさ (enjoyment)」という感情的側面を置く理論として、「スポーツ傾倒モデル (sport commitment model)」がある。スポーツ傾倒とはスポーツへの参加を継続したい欲求あるいは継続に作用する意志のこと

である (Scanlan, Carpenter, Schmidt, Simons, & Keeler, 1993)。当初、このモデルを提唱した Scanlan ら (Scanlan, Carpenter, et al., 1993; Scanlan, Simons, Carpenter, Schmidt, & Keeler, 1993) は、スポーツ傾倒に対する予測的因子として楽しさのほかに、「他にやりがいのある活動 (involvement alternatives)」、「個人的な投資 (personal investments)」、「社会的な制約 (social constraints)」、「参加する利点 (involvement opportunity)」があると仮定する加算的モデルを想定していた。すなわち、ある特定のスポーツをすることに楽しさを感じ、そのスポーツに多くの時間、金銭、努力を費やし、重要な他者からそのスポーツへの参加継続を義務づけられ、スポーツ参加によって友情や大人との楽しい関係を育んだり旅行や体調管理ができたりするといった参加の利点を多く感じている個人ほど加算的にそのスポーツへの傾倒が強くなり、他にやりがいのある活動がある場合にはそのスポーツへの傾倒は減算的に低くなると考えられていた。しかし、スポーツにおける大人の影響という観点でみると、このモデルが重要な他者からの影響としてスポーツ参加・継続の義務づけのみがスポーツ傾倒に肯定的に働くとは仮定するのは訝しく思われる。他方の支持的な関わりもスポーツ傾倒に肯定的に関係することがこれまでに明らかになっており (Carpenter & Coleman, 1998; Weiss, Kimmel, & Smith, 2001)、現在では、社会的な制約だけでなく社会的支援・援助もスポーツ傾倒モデルにおける重要な決定因として見なされている。また、一連の研究成果を統計的にみると楽しさはスポーツ傾倒と強い相関があつてスポーツ傾倒に対する他の予測因子の寄与を抑制している可能性があり、大人からの支援、知覚される有能さ、参加する利点などは楽しさの源泉として理論的に位置づけることもできる。そこで近年、Weiss et al. (2001) によって、楽しさを媒介としたスポーツ傾倒モデル (Figure 1 参照) が提唱・検証されており、スポーツ傾倒の先行因である楽しみの増減を規定する要因を特定しようとする研究も発表されている。

これら5つの理論は前提視する内容や定義され

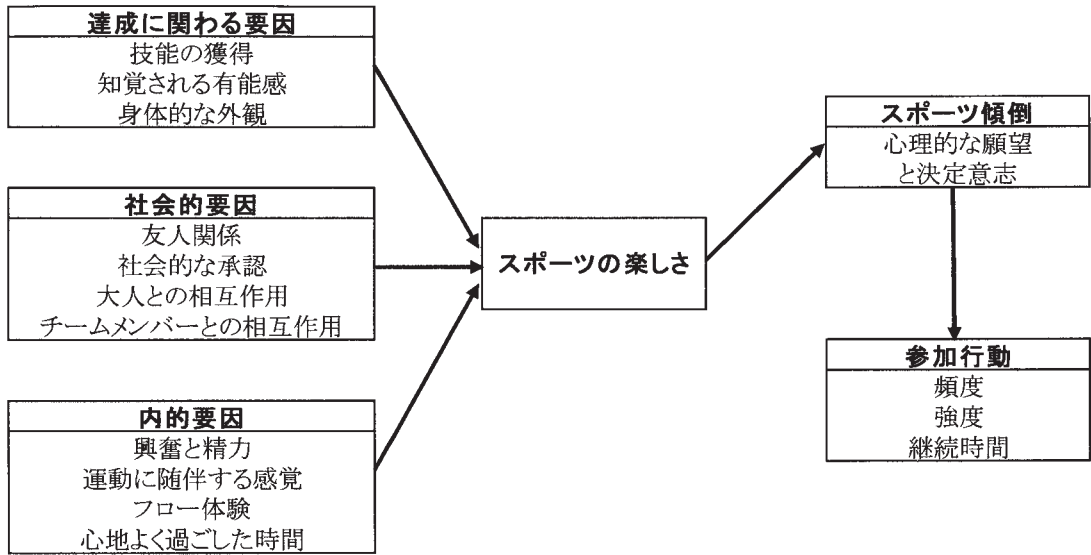


Figure 1 スポーツの楽しさの源泉と帰結 (Weiss & Amorose (2008) をもとに作成)

る概念において違いが認められるものの、ある部分での共通項があるように思われる。特にスポーツに参加する子どもや個人のどのような側面に着目するかに関して、コンピテンス動機づけ理論では有能感・統制感や肯定的な感情とそれらに連動した内発的動機づけを、自己決定理論では有能感欲求・自律性欲求・関係への欲求とそれが満たされることで誘発される内発的動機づけを、達成目標理論ではどのような達成目標をもとに有能感を見出すかというところを、期待・価値理論ではスポーツ参加の動機づけに作用する成功への期待や課題の主観的価値・重要性を、そしてスポーツ傾倒モデルではスポーツ参加への欲求や意志とその背後にある感情的な楽しさというものを重視している。すなわち、どの理論も、自分自身に対する覚知（有能感、統制感・自律性、成功への期待）、自分自身に対する活動の重要性の覚知（課題の主観的価値）、スポーツ活動や参加に伴う感情（肯定的な感情、楽しさ）といった個人の主観的側面を理論の中核に据えているようである。こうした理論的動向からすれば、スポーツにおける大人の影響に関する先行研究においては、スポーツ活動やその場で展開される大人とのやりとりの中で子どもが何を経験し主観的に感じとってきたかという子どもの主観的な覚知・感情に焦点が当てられ

ているはずである。

また、どの理論も、自己覚知や感情が誘因となって生じるスポーツ参加への欲求や動機づけ（内発的動機づけ、スポーツ傾倒）あるいは実際のスポーツ参加・継続といった行動の側面に目が向けられている。この背景には、スポーツ心理学の大きな目標の1つが身体活動やスポーツへの参加・継続を可能ならしめる要因を特定することに在るからなのであろう。さらに言えば、身体活動やスポーツ活動の継続によって日常生活における身体的・心理的・社会的な利得が向上するという風潮が、スポーツ心理学の研究目標に潜在しているからなのかもしれない。

3. 大人のいかなる側面がスポーツに参加する子どもの心に作用するか：研究レビュー

前節ではどの理論も子どもの自己覚知や感情に焦点が当てられていると述べたが、自己覚知や感情に及ぼす社会的影響のメカニズムはそれぞれの理論の間で幾らか異なるところがある。そこで以下では、親や大人の働きかけや特性とスポーツに参加する子どもの心理的特徴・発達との関連を検討した研究を前節で挙げた理論に沿って概覧し、何がどこまで明らかになっているのかを本節では示したい。

(1) コンピテンス動機づけ理論

この理論では、子どものパフォーマンスや成果よりも達成しようとする努力について大人が肯定的なフィードバックや強化あるいはモデル提示をすることで、子どもは有能感や肯定的感情、そして内発的動機づけを発達させると考える (Harter, 1981, 1999)。特に、大人の励ましや肯定的なフィードバックの影響については幾つかの研究 (Babkes & Weiss, 1999; Brustad, 1993, 1996; Leff & Hoyle, 1995; 武田・中込, 2003) が取り組んでおり、例えば、Babkes & Weiss (1999) は、9～11歳のサッカー競技に参加する子どもたちが、サッカーにおける有能感、楽しさ、内発的動機づけ、そして自分の競技参加に対する親の影響についてどのように知覚しているかを質問紙で調査している。その結果、父親や母親が自分のパフォーマンスに肯定的なフィードバックを送っていると知覚している子どもでは、有能感や楽しさ、また内発的動機づけが高かった。本邦でもこれと類似した研究として武田・中込 (2003) が11～14歳のジュニアサッカー選手に対して、サッカーにおける有能感や内発的動機づけ、また選手のサッカー活動に対する親の行動・態度について質問紙で尋ねている。この調査では、父親や母親がサッカー活動に対して励ましのメッセージや態度を示すと知覚している子どもほど有能感が高いことが示された。しかし両研究ともに、親の励ましや行動に対する親自身の評価が子どもの有能感や内発的動機づけと関連することは示されていない。

また、コンピテンス動機づけ理論では、大人によるモデル提示、受け入れ、強化によって子どもはその大人がもつ動機づけや信念を内在化させると考える。7～14歳のサッカーリーグに参加する子どもとその両親に質問紙調査を行った研究 (McCullagh, Matzkanin, Shaw, & Maldonado, 1993) は、子どもの社会的能力や競技能力について子ども自身の評価と親による評価が中程度の有意な関連があることを示した。これは、子どもがスポーツ参加における親の信念を内在化させている可能性をうかがわせる。しかしさらに厳密に考えれば、子どもは大人が自分自身の競技能力などをどのように捉えているかを解釈し、それを競技能力における自己評価として内在化していると言

え、コンピテンス動機づけ理論の枠組みで大人の影響を考えると、大人の信念に対する子どもの解釈が重要な要因だと考えられよう。それに関して、Babkes & Weiss (1999) は9～11歳の子どものサッカー競技の能力に対する親の評価と子ども自身の評価、さらにその親の評価に対する子どもの知覚との関係を検討し、自分自身の競技能力に対する親の評価を肯定的に知覚している子どもほど競技能力に対する自己評価も高いことを明らかにした。しかし、親による評価そのものは子どもの自己評価とは関係がなく、親の信念や評価に対する子どもの解釈が重要であることが示唆されている。その後、小学生とその両親を対象とした縦断的な質問紙調査 (Bois, Sarrazin, Brustad, Chanal, & Trouilloud, 2005) によって、子どものスポーツ能力に関する親の評価に対する子どもの評価が、親の評価と子どもの自己評価の関係に対して媒介的な働きをなしていることが明らかになっている。

大人のモデル提示も、コンピテンス動機づけ理論では大人の影響にかかわるメカニズムとして重要であり、親がスポーツや運動に積極的に関わりをもったり、その中で肯定的な感情を表出したりすることが子どもの自己評価、楽しさ、内発的動機づけ、参加継続に関与することが明らかになっている (Babkes & Weiss, 1999; Bois, Sarrazin, Brustad, Trouilloud, & Cury, 2005; Brustad, 1993, 1996; Weiss & Fretwell, 2005)。例えば、Babkes & Weiss (1999) の研究では、親のモデル提示に対する子どもの知覚がサッカー競技に対する子どもの自己評価や子どもの内発的動機づけに関係していたが、親の報告によるモデル提示は子どもの自己評価とは関係がなかった。しかし一方、Bois, Sarrazin, Brustad, Trouilloud et al. (2005) では、親の運動への関与に関する親自身の評価がその1年後の子どもの運動への関与を予測しており、親のモデル提示の働きを示唆する結果を得た。このように両者で結果が異なるのは何故であろうか。対象年齢が同じ9～11歳であっても、Babkes & Weiss (1999) がサッカー選手とその両親を対象としているのに対して、Bois, Sarrazin, Brustad, Trouilloud et al. (2005) は一般の小学生とその両親を対象としているからの

かもしれない。すなわち、前者は、競技能力や勝負に重きが置かれ、親は子どものサッカー活動に時間や金銭を投資するという文脈で調査が行われているのに対して、後者は特定の競技に参加する子どもを対象としているわけではなく、子どもやその親には一般的な運動能力や運動参加について尋ねており、双方で子どもに対する親の期待や評価の質や度合いがかなり異なるからなのかもしれない。

一方、スポーツ指導者のフィードバックが子どもの心的側面に及ぼす影響に関する研究も盛んに行われており、そうした研究はSmith, Smoll, & Hunt (1977) の「コーチング行動評価システム (CBAS: coaching behavior assessment system)」の開発に始まる。CBASは指導者が12種の行動それぞれをどれくらいの頻度で示すかを行動観察によって測定するものである。Smithら (Smith, Smoll, & Curtis, 1978; Smith, Zane, Smoll, & Coppel, 1983) はCBASを用いて指導者のフィードバックと子どもの自尊感情やシーズン後の態度との関連性を検討して、子どもを励ます支持的で教育的なフィードバックが子どもの感情や態度に肯定的に関与し、罰の要素を含むフィードバックは否定的に関与することを示してきた。また、Smithら (Barnett, Smoll, & Smith, 1992; Smith, Smoll, & Barnett, 1995; Smoll, Smith, Barnett, & Everett, 1993) はこのCBASを指導者訓練の効果の確認のために用い、シーズン前に一部の野球指導者を訓練プログラムに導入して励ましや支持的・教育的なフィードバックができるよう訓練して、訓練を受講した指導者とそうでない指導者それぞれが指導する子どもの心理的側面やシーズン後の参加・離脱について比較している。その結果、訓練を受講した指導者の指導を受けた子どもはシーズン後に自尊感情を増大させ、特性不安を低減させ、楽しさのレベルを高めており、また野球から離脱する子どもは少なかった。特に子どもの自尊感情にかかわる指導方法について訓練を受けた指導者の肯定的な効果は、自尊感情の低い7~11歳の水泳女子選手の自尊感情においても確認されている (Coatsworth & Conroy, 2006)。CBASを用いたこうした行動観察研究のほかに、CBASをもとにして、練習や競技中に示す指導者

のフィードバックパターンを子どもや選手が評定する質問紙も開発されている (Smith, Smoll, & Curtis, 1978)。その質問紙を用いて子どもや青年期の選手を調査した研究 (Allen & Howe, 1998; Black & Weiss, 1992; Cumming, Smoll, Smith, & Grossbard, 2007) ではおおむね、パフォーマンスの成功とミスの双方に対して励みになる支持的で教育的なフィードバックが多いことが、子どもや選手の心理的側面に肯定的な効果を示し、他方、罰的なフィードバックが多かったり子どもや選手の成功やミスを無視してしまったりする指導者の傾向は否定的な効果を示すことが示唆されている。

以上、コンピテンス動機づけ理論の主張内容に沿って大人の影響に関する研究を概観してみた。方法論上の違いまたは調査対象者の置かれている文脈の違いによって幾分結果や示唆は異なるものの、親や指導者が子どものパフォーマンス成功だけでなくミスや努力に対して励ましや肯定的・支持的なフィードバックを与えたり肯定的な期待や信念をもったりすることは、子どもの有能感や自尊感情・肯定的感情、内発的動機づけなどの発達において重要であることが示唆されているようである。また、そうした大人のフィードバックや期待・信念を子どもがどのように解釈するかということも重要なようである。

(2) 自己決定理論

自己決定理論においてDeci & Ryan (1985; Ryan & Deci, 2000, 2002) の主張は特に子どもの内発的動機づけの維持・向上に焦点が向けられるものであり、子どもの個人的要因や社会文脈的要因を重視しつつも、大人のフィードバックや関わり方に潜在している統制的側面と情動的側面が子どもの生来的な有能感欲求、自律性欲求、関係への欲求をいかに満たすかが内発的動機づけの向上・維持・減退を決定づけるというところに注目するものであった。このような、内発的動機づけおよびそれに関わるフィードバックへの注目は、スポーツという領域においては、スポーツ活動の動機づけに直接的・実践的に関わる指導者や教師のフィードバックのあり方を検討する研究を誘発するのは必定であろう。その初期の研究 (例えば、Vallerand, 1983; Vallerand & Reid, 1984; Whitehead & Corbin, 1991) では、例えば

Vallerand & Reid (1984) は大学生を対象に、初回に重心動揺計を用いた運動課題に対する内発的動機づけと有能感を測定し、運動課題に対して適度なレベルの内発的動機づけを示した学生にはその課題の終了後に言語的に肯定的あるいは否定的なフィードバックを与えるか、フィードバックそのものを与えないかして、再び内発的動機づけと有能感を測定した。その結果、肯定的フィードバックを与えた場合には内発的動機づけと有能感は増大し、否定的フィードバックを与えた場合には逆効果を示した。また、パス解析によって、有能感の内発的動機づけに対するフィードバックの影響において媒介変数となることが示され、それは有能感欲求が満たされることで内発的動機づけが増進するという Deci & Ryan の仮説を支持していた。賞賛であっても不適切でタイミングの悪い賞賛は選手の有能感を低減させるという結果もある (Horn, 1985) が、たいていの研究は他者からの肯定的なフィードバックが有能感や内発的動機づけの強さに関与し、否定的なフィードバックがその反対の効果をもつことを示している (Henderlong & Lepper, 2002)。また、Amorose & Horn (2000) はインカレ選手を対象に指導者の複数のコーチング行動の頻度と選手自身の内発的動機づけを質問紙で尋ねて、双方の関係を検討した結果、具体的な情報を提供しうる肯定的なフィードバックが多いことと、罰的なフィードバックや選手のパフォーマンスの無視が少ないことが選手の内発的動機づけの強さと関連することを示した。Amorose & Horn はこの結果を Deci & Ryan の論に依拠して説明している。

また、パフォーマンスに対するフィードバックではなく、より広い意味での関わり方 (対人関係スタイル) も重要であり、Amorose ら (Amorose & Horn, 2000, 2001; Hollembeak & Amorose, 2005) は選手の内発的動機づけと知覚される指導者のリーダーシップ・スタイルの関係を検討している。例えば Hollembeak & Amorose (2005) は様々な大学スポーツの選手に指導者のリーダーシップ・スタイル、知覚される有能感・自律性・関係への意識、そして内発的動機づけについて質問紙に回答してもらい、共分散構造分析によって、指導者による社会的支持以外の全ての行動が

有能感・自律性・関係への意識を予測し、さらにそれら 3 つの心理的変数が内発的動機づけを予測するというモデルを示した。特に、指導者が個人的権威を利用して選手の意志とは無関係に物事を決定するという権威的行動が少ないことが選手の自律性を予測し、また指導者が物事を決定する際に選手に尋ねるという対等な行動の多さが自律性を予測し、そして自律性の高さが内発的動機づけの強さを予測するという、指導者のリーダーシップ・スタイルと選手の内発的動機づけの間に選手の自律性が媒介するモデルが示された。これは、有能感欲求の満足だけでなく、指導者による意志決定においては自律性欲求の満足が内発的動機づけの維持・向上に作用することを示唆している。意志決定で子どもや選手の意志を確認するだけでなく、子どもや選手への関わり全般において彼らの自由を尊重して自律性を推奨する指導者の「自律性支持的な関わり方 (autonomy-supportive style)」が、子どもや選手の自律性欲求を満たし、ひいては内発的動機づけを高めるということが示唆されたということであろう。他にも、Pelletier ら (Pelletier, Fortier, Vallerand, & Briere, 2001; Pelletier, Fortier, Vallerand, Tuson, Briere, & Blais, 1995) は、指導者の自律性支持的な関わり方の多さと内発的動機づけの強さの間に関係があることを明らかにしている。

自己決定理論という観点で研究成果を振り返ると、研究の多くは大学生が対象であり、また指導者のフィードバックや対人関係スタイルを子どもや選手の内発的動機づけの起因として着目している。また、各研究の成果を連ねて見ると、有能感欲求、自律性欲求、関係への欲求それぞれの満足を動機づけの重要な予測因として組み込んで研究に取り組んでおり、Deci & Ryan が主張する仮説は大方支持されているようである。

(3) 達成目標理論

達成目標理論では、個人がどのような目標 (課題関与的な目標か、自我関与的な目標か) に基づいてスポーツ活動の中で有能感を高めたり有能さを発揮したりするかによって、その個人の動機づけや有能感、あるいは精神的健康などが左右され则认为する。ある特定の目標を取り入れていく過程は個人的要因も大きく関わるが、スポーツに

おける大人の影響に関する研究においては、重要な他者が生み出す状況の要因である、動機づけ雰囲気注目されてきた。特に子どもや選手にとって重要な他者である指導者・体育教師や親がもつ特定の目標構造は子どもや選手の目標志向性と強く関連しており (Ebbeck & Becker, 1994; Duda & Hom, 1993; Papaioannou, 1994; Seifriz, Duda, & Chi, 1992; White, 1996), 確かに, 指導者・体育教師や親が生み出す, スポーツ活動における動機づけ雰囲気が子どもや選手の目標志向性の発達において重要な働きをしていることが示唆されている。ただ, こうした動機づけ雰囲気が子どもや選手にどのような目標や利得をもたらすかについて子どもや選手の視点にたつて考えると, やはり, 大人が作り出す状況を子どもがどのように知覚するのかという観点から動機づけ雰囲気を理解していくことが重要であろう。それゆえに, スポーツ活動の中で知覚される動機づけ雰囲気を測定する尺度が幾つか開発されてきた。そうした尺度の1つとして, スポーツ活動において指導者の目標構造が潜在する状況に対する子どもや選手の知覚を評価するために, Seifriz et al (1992) が作成した, 「スポーツにおける動機づけ雰囲気尺度 (PMCSQ: perceived motivational climate in sport questionnaire)」がある。この尺度は「パフォーマンス志向的雰囲気 (performance climate)」と「達成志向的雰囲気 (mastery climate)」の2つの下位尺度で構成され, 前者は競技で他者より優位に立つことやミスに対して罰を与えることが強調される雰囲気の知覚を, 後者は懸命に取り組むことやスキルを改善することおよびミスを学習の一部としてみるものが強調される雰囲気の知覚を測定するものである。スポーツ活動における前者の雰囲気はそこに参加する子どもや選手の目標志向性を自我関与的な方向に促し, 後者の雰囲気は課題関与的な目標志向性を促すと考えられている。また, Newton, Duda, & Yin (2000) は動機づけ雰囲気はより多次元の因子構造をもつと考えて PMCSQ の改良版として「PMCSQ-2」を作成し, その尺度が上位因子として「パフォーマンス志向的雰囲気」と「達成志向的雰囲気」の2因子で構成され, さらに前者の上位因子が「不平等な認識」, 「ミスに対する

罰」, 「チーム内での拮抗や競争」という3つの下位因子で, また後者の上位因子が「努力と改善の強調」, 「知覚される重要な役割」, 「協力的な学習」という3つの下位因子で構成されることを確認している。さらに, 子どもや選手が自己評価の基準や目標を家庭内で作り出されるスポーツ活動に関連した雰囲気から学び取っていくことも考えられ, White, Duda, & Hart (1992) は「親による動機づけ雰囲気尺度 (PIMCQ: parent initiated motivational climate questionnaire)」を開発している。その尺度はパフォーマンス志向的雰囲気に関係する2因子と達成志向的雰囲気に関連する1因子の合計3因子で構成されることが確認されている。

こうした尺度を用いて, スポーツ活動におけるパフォーマンス志向的雰囲気や達成志向的雰囲気に対する子どもや選手の知覚が, スポーツでの成功の原因についての信念, 肯定的・否定的感情, 有能感, 目標志向性, 道徳性などどのように関与するのかについて多くの研究が行われてきた (詳細は Harwood, Spray, & Keegan (2008) を参照されたい)。これらの研究によって, 達成志向的雰囲気の知覚はスポーツ活動への参加や心理的発達において適応的な望ましい結果をもたらすが, 一方, パフォーマンス志向的雰囲気を知覚する子どもや選手においては適応的な動機づけのパターンが殆ど見られず, 望ましくない信念・自己評価や行動パターンが見られることが明らかになっている (Harwood, Spray, & Keegan, 2008)。こうした研究成果の動向から, 親や指導者が生み出す動機づけ雰囲気の中でも達成志向的雰囲気はスポーツ活動における子どもや選手の心理的発達において大きな働きをもつと確信してもよいであろう。

(4) 期待－価値理論

期待－価値理論では, 子どもや選手は特定のスポーツ活動や競技において成功への期待を有し, そのスポーツ活動や競技が自分にとって重要な価値をもつと認識することで, その活動を継続したりその中で達成すべき課題に努力して取り組んだりすると考える。そして, その成功への期待や活動・課題の主観的価値を子どもが発達させる上で特に, 経験の提供者, 解釈者, また模範者

である親の働きが大きいと考えている。Brustad (1993) は小学校 4 年生の子どもに、知覚される有能感と、運動の興味的価値や有能的価値ともいえる運動に対する魅力について質問紙で回答してもらい、またその子どもの親にも親自身の運動に対する楽しさ（興味的価値）、身体的健康レベル（子どもにとって模範となる親の要素）、運動の重要性（有能的価値）、またどの程度子どもに運動を促したり子どもとともに運動やスポーツに参加したりするか（運動の促し）について回答してもらい、親子間の関連性について検討した。その結果、親自身の運動の楽しさは親による運動の促しの多さに対して正の影響を及ぼし、次に親による運動の促しは子どもの運動に対する有能感の強さに正の影響を及ぼし、さらにその有能感は運動に対して子どもが抱く魅力の強さに正の影響を及ぼすことが示された。Brustad (1996) はより多様な人種および社会経済的地位の子どもとその親を対象にした調査においても同様の結果を発表しており、この一連の研究は運動に対して親が抱く価値に基づいて親が子どもに運動経験を提供することで、子どもが運動に有能感や魅力を抱くようになるという、社会化のプロセスが存在することを示唆している。また、Kimiecik ら (Dempsey, Kimiecik, & Horn, 1993; Kimiecik & Horn, 1998; Kimiecik, Horn, & Shurin, 1996) は、小学生の運動に対する評価や日常行われる「適度に精力的な運動 (MVPA: moderate to vigorous activity)」に及ぼす親の影響について子どもとその親に質問紙で調べている。Dempsey et al. (1993) の研究では、子どもの能力に対する親の評価が高いほどその子どもは適度に精力的な運動を行っていることが示され、親の模範的な行動は関与しないことが示された。Kimiecik et al. (1996) では、自分自身の能力を親が高くみていと知覚している子どもほど自分の能力に対して高い評価をしていることが明らかになった。Kimiecik & Horn (1998) では、親自身の適度に精力的な日常の運動経験が子どもの適度に精力的な運動に関係しているわけではなく、子どもの能力に対する親の評価が関係していることが示された。Kimiecik らのこうした一連の研究は、経験の提供者・模範者というよりも解釈者としての親が、子どもの運動に対する

有能感・魅力や参加に大きく影響を及ぼすことを示唆している。

しかし、上記に示した研究は親の影響における時間的経過を考慮しているわけではない。その点、縦断的調査を行った Bois ら (Bois, Sarrazin, Brustad, Trouilloud, & Cury, 2002; Bois, Sarrazin, Brustad, Chanal, et al., 2005; Bois, Sarrazin, Brustad, Trouilloud, et al., 2005) の研究は興味深い。Bois et al. (2002) は小学生とその母親を対象に初回調査における子どもの運動能力に対する母親の知覚・評価と 1 年後の 2 回目調査での子どもの身体的な有能感との関係を質問紙で調査している。その結果、初回調査の運動能力に対する母親の知覚・評価はその調査時において子どもが知覚する身体的有能感や実際にテストで測定された子どもの運動能力とは関連がなく、2 回目調査における子どもの身体的有能感を予測することが示された。Bois, Sarrazin, Brustad, Chanal, et al. (2005) は Bois et al. (2002) と同様の調査で、子どもが知覚する有能感に親の評価が及ぼす影響過程において、子どもの運動能力に対する親の評価を子ども自身が知覚・評価するという「再帰的な評価 (reflected appraisal)」が重要な媒介因になっていることを示した。さらに Bois, Sarrazin, Brustad, Trouilloud, et al. (2005) は父親と母親が及ぼす影響過程の違いを示し、母親を基点とする影響過程として、母親の評価が子どもの知覚する有能感を予測し、さらにその有能感は子ども自身の運動量を予測すること、また、母親の日常の運動量が直接的に子どもの日常の運動量を予測することを見出している。一方、父親を基点とする影響過程として、子どもの運動能力に対する父親の評価が直接的に子どもの日常の運動量を予測することを見出している。このように、親の運動量や評価による影響は、経験の模範者また解釈者としての親の働きを示すものであろう。

期待－価値理論が提示する仮説内容に沿って親の影響過程に関する研究を見てきたが、まず、スポーツや運動に対する子どもの参加・継続や有能感・魅力の発達においてスポーツや運動の模範者また経験の解釈者・評価者としての親の影響が大きいことは明らかだといえる。また、子どもに対する親の知覚・評価と子ども自身の知覚・評価の

間に、親の信念や行動に対する子どもの知覚・解釈、もっといえば子どもが自分自身に対する親の評価をどのように知覚・解釈しているかという再帰的评价が媒介している可能性が示されており、子どもが親の行動や評価をどのように受け止めて解釈するかということは親の影響を考える上で大きなテーマであろう。しかし、親の影響の仕方は子どもの性別、参加するスポーツの種類、家庭環境・地域風土といった要素によって異なってくる可能性がある。つまり、似たような信念・評価に基づいてある特定の行動を別々の親が同じように発したとしても、性別や状況・文脈的要因の違いによって子どもが発達させる成功への期待や有能感あるいはスポーツや運動の価値・重要性も異なってくるということである。それゆえに、子どもや親が置かれている社会文脈的要因にも注意して検討していくことも必要であろう。

(5) スポーツ傾倒モデル

前節では、スポーツ傾倒モデルとして、スポーツに参加することの楽しさを起因としてスポーツへの傾倒あるいは実際の参加・継続が成り立つとするモデル(Weiss et al., 2001)を提示したが、このモデルの本質は、スポーツ活動の中で起こる様々な出来事を知覚することによってある特定の感情的反応が生じ、それがさらにスポーツ傾倒といった動機づけの側面やスポーツ参加・継続・撤退といった実際の行動に影響に及ぼすと仮定するところにある。さらにいえば、スポーツ活動の中で起きる出来事の一部はストレス³をもたらす否定的な感情反応を引き起こすであろうし、また他の出来事は楽しさの感受をもたらして肯定的な感情反応を引き起こすであろう(Scanlan, Babkes, & Scanlan, 2005)。そして、肯定的感情はスポーツ活動への欲求または肯定的な動機づけを引き起こすが、否定的感情はスポーツ活動への欲求を減退させ回避的な動機づけを引き起こすことが考えられる。すなわち、スポーツ傾倒モデルに基づいてスポーツにおける大人の影響を検討するとき、楽しさのような肯定的感情だけでなく、ストレスや否定的感情も視野に入れて、双方の感情それぞれを規定する大人の働きかけや大人とのやりとりを考えていく必要がある。実際、スポーツ活動における楽しさの感覚は、スポーツ活動の

持続や努力しようとする意志(Scanlan, Ravizza, & Stein, 1989)、またはスポーツ傾倒をもたらす(Carpenter & Scanlan, 1998; Carpenter, Scanlan, Simon, & Lobel, 1993)が、他方のストレスに関しては、それが個人の中で遷延すると、その個人はスポーツ活動に対して回避的な行動を示したり(Gould, Greenleaf, & Krane, 2002)、「燃え尽き(burnout)」たりする(Smith, 1986)ことが報告されている。そこで、ここでは、肯定的感情だけでなくストレスや否定的感情をもたらす要因にも着目して、研究成果を概覧していきたい。

まず、楽しさや肯定的感情をもたらす要因について、Scanlan & Lewthwaite (1986)は、9～14歳のレスリング競技に参加している少年たちに親や指導者の行動や反応に関する項目とスポーツの楽しさに関する項目に回答してもらい、両者の関係について統計的に検討している。その結果、レスリング活動の中で親がプレッシャーを与えたり母親が自分のパフォーマンスに対して否定的感情を示したりはしないと知覚している少年ほど、また自分のパフォーマンスに対して親や指導者が満足して活動を支援していると知覚している少年ほど、レスリングの活動を楽しんでいることが明らかになった。この結果と同じように、スポーツに参加する一般の子どもを対象とした他の研究(Averil & Power, 1995; Babkes & Weiss, 1999; Brustad, 1988; Leff & Hoyle, 1995)でも、親のプレッシャーや否定的な感情反応あるいはパフォーマンスに対する期待が強いほど、子どもが抱く楽しさは減退することが示されている。また、エリートレベルのスケート選手26名を対象にインタビューを行ったScanlan et al. (1989)の研究では、スケート選手が自分の能力によって家族や指導者に喜びや誇りを与えられることを楽しさの源泉としていることが報告されている。しかし、指導者の支援や評価が楽しさを規定している一方で、親の影響に関わる要因は楽しさを予測しないという結果を示したScanlan, Carpenter, Lobel, & Simon (1993)の研究もある。

また、他方の、ストレスを生み出す要因についてはまず、Scanlan & Lewthwaite (1984)が、レスリング少年を対象とした研究において、親のプレッシャーや親や指導者による否定的な評価に

対する懸念が試合前のストレスに寄与することを明らかにしている。その後の研究 (Bray, Martin, & Widemeyer, 2000; Gould, Jackson, & Finch, 1993; Gould & Weinberg, 1985; Scanlan, Stein, & Ravizza, 1991) でも、親や指導者の期待に沿うこと、否定的な評価、否定的な反応を受けることに対する試合前の懸念はストレスになることが報告されている。さらに、エリート選手のインタビュー研究においても、レスリング選手やフィギュアスケート選手が否定的な感情の源泉として指導者やチームメイトとのコミュニケーション上の問題を取り上げていること (Gould, Eklund, & Jackson, 1991, 1993; Gould, Jackson, et al., 1993), また、スケート選手が親や指導者との不和や親による心理的操作をストレスの源泉として見ていることが報告されている (Scanlan et al., 1991)。

こうしてみると、親や指導者の肯定的な評価や反応はスポーツに参加する子どもや選手の楽しさを予測するが、また、自分のパフォーマンスによって親や指導者の期待を満足させたり親や指導者を喜ばせたりすることも、子どもや選手のスポーツ活動の楽しさの背景にあるようである。そして、スポーツ活動における子どもや選手のストレスや否定的感情の源泉としては、親や指導者による否定的な反応・評価あるいはそれに対する懸念や親や指導者との葛藤をあげることができるが、それだけでなく、楽しさをもたらすはずの、親や指導者の期待に沿うことや満足させることが子どもや選手にとってはストレスにもなるようである。

以上、各理論に沿って、スポーツに参加する子どもに及ぼす大人の影響過程に関する研究成果をみてきた。大人の行動的側面についてみれば、これまでの研究は、子どもがパフォーマンスに成功した際には肯定的な感情を示すことだけでなく、パフォーマンスに失敗しても大人が肯定的・支持的に具体的情報を与えながらタイミング良くフィードバックしたり、子どもの自律的な判断を尊重したりすることが、子どもの有能感や自律性などの自己覚知を高めることを示唆しているように思われる。また、親が子どもにスポーツの経験を提供したり、子どもとともにスポーツに参加したりして楽しむことで、子どもはそれをモデルと

してスポーツの価値や楽しさを学んでいくように思われる。

また、大人の認知的側面に関しては、子どものスポーツや運動能力に対して大人が肯定的に評価していることが、大人の反応・評価に対する子どもの解釈を通じて最終的に有能感などの自己覚知を高めることに繋がるものと思われる。さらに、大人の目標志向性や価値観によって生み出されるであろう、動機づけ雰囲気が相対的に達成志向的なものであれば、子どもはスポーツにおけるパフォーマンスの成功よりもスキル上達や改善に有能感を見出していくものと思われる。

こうした大人の行動的・認知的側面、またそれを通じて生み出される状況によって発達する子どものスポーツに対する肯定的価値、有能感、楽しさは、内発的動機づけの源泉となりスポーツの参加や継続を促すのであろう。しかし、大人側の行動、認知、動機づけ雰囲気それぞれがどのように連動・連関しているのかということまでは、これまでの研究では定かではない。そうした大人側のダイナミクスを明らかにしていくことは今後重要な課題になるであろう。

4. 大人の知覚・解釈と子どもの知覚・解釈のずれは何を反映しているか？

スポーツにおける大人の影響に関する研究成果を振り返ると、これまでに、大人による大人自身についての評価が子どもの評定・評価による子ども自身の変数に直接関与しないということがよく見受けられた。例えば、親の自己報告による親自身の行動を扱った研究では、それと子どもの報告による子ども自身の変数との関連が認められなかった (Babkes & Brustad, 1999; Brustad, 1988; Dempsey et al., 1993; 武田・中込, 2003)。また、子どもの能力に対して親が抱く信念を親自身が評定した変数が子どもの評定による子ども側の変数と関連を示さないことも多く見られた (Babkes & Weiss, 1999; Bois, Sarrazin, Brustad, Chanal, et al., 2005; Duda & Hom, 1993; McCullagh et al., 1993)。さらに、ある研究 (Kanters, Bocarro, & Casper, 2008) は、親による関わりの量や質について子どもとその親自身ともに評定してもらい、両評定の結果を比較している。その結果、父親や

母親からのプレッシャーについては子どもの評定のほうが親自身の評定よりも有意に高く、一方、父親や母親からの支持・援助については親自身の評定が子どもの評定よりも有意に高いことが示された。そして、親の評定データから子どものデータを差し引いた変数データを説明変数として検討し、親の評定と子どもの評定が一致していることが子どものスポーツにおける楽しさを予測することを明らかにしている。このような結果は、親の関わりについて親自身と子どもの知覚・解釈が一致していることが重要であることを示唆している。

先の研究レビューを通して、スポーツに参加する子どもや選手の知覚・解釈がスポーツ参加やそこで起こりうる心理的発達を検討する際に重要であることを指摘した。しかし、往々にして子どもの知覚・解釈と親の知覚・解釈がずれるという事実がある。それは何を反映しているのであろうか。それについて、(1) 親から子どもへの影響過程という視点と、(2) 親自身の心理的過程という視点からさらに検討したい。

(1) 親から子どもへの影響過程

子どものスポーツ活動に対する親の行動の影響を親の自己報告と子どもの報告から検討した武田・中込(2003)は、親と子の知覚・解釈のずれを親のコミュニケーションに対する子どもの知覚・解釈という観点から論じている。コミュニケーションはコンテンツ(内容、言葉、情報など)とコンテキスト(脈絡、状況、非言語的メッセージなど)の2つによって成り立っており、子どものスポーツ活動における親の関わりには様々な行動が複合的に含まれていて、子どもがその親の行動から何をコンテンツあるいはコンテキストとして優位に知覚・反応するかによって、親の行動に対する子どもの回帰的な解釈・評価は異なってくるという。これと類似してHorn & Horn(2007)は、親が自律性支持的な行動でもって子どものスポーツ活動に多く関わる場合にはそれは子どもに促進的な影響をもたらすが、親が多く関わってもそこに統制的な行動が多くを占めるのであればそれは子どもにとって否定的な効果をもたらすであろうと述べている。すなわち、子どものスポーツ活動に対する関わりは頻度や量ではなく、その質のほうが重要だ(Horn & Horn, 2007)と

いうのである。武田・中込(2003)の論もHorn & Horn(2007)の論も、親の行動をコンテンツ対コンテキスト、あるいは多様な次元から把握していく必要性を指摘していると言えよう。研究として報告されていないが、指導者の関わりや行動についても指導者自身の知覚・解釈と子どもや選手の知覚・解釈がずれていることは起こり得、同様に検討していかななくてはならないのは言うまでもない。

こうした動向からすると、子どもが親や指導者などの大人の関わりや行動をどのように知覚・解釈するかという観点から質的にアプローチし、そこから定量的に測定可能な安定した尺度を構成していくことが必要かもしれない。これに関してWeiss & Smith(Weiss & Smith, 1999, 2002; Weiss, Smith, & Theebboom, 1996)の一連の研究は方法論上参考になるだろう。親や指導者との関係や行動ではないが、スポーツ活動における友人関係を対象としたこの一連の研究において、まずWeiss et al.(1996)は、スポーツに参加する子どもの友人関係の概念を探るために、8~16歳の38名の子どもを対象に(インタビュー対象者は様々なスポーツ(チームスポーツ、個人スポーツ)また多様なレベル(競技レベル、レクリエーションレベル)から構成されている)スポーツにおける親友について詳細なインタビューを行っている。そして、インタビューのデータはPatton(1990)の帰納的内容分析法に従って分析され、12の肯定的な友人関係カテゴリーと4つの否定的な友人関係カテゴリーを抽出している。さらに、Weiss & Smith(1999)でその16のカテゴリーや下位カテゴリーに基づいて項目が考案され、6つの下位尺度で構成される「スポーツ友人関係尺度(SFQS: sport friendship quality scale)」の信頼性・妥当性が確認されている(Weiss & Smith, 1999, 2002)。

また、実のところ近年、Lauer, Gould, Roman, & Pierce(2010a, 2010b)が現役のテニス選手に親の影響についてインタビューを行い、インタビューデータに基づいてテニスが上達していく各段階での肯定的また否定的影響をもつ親の行動をカテゴリー化したり、選手の個別発達における親子関係の特徴を抽出したりしている。しかし、こ

の一連の研究の焦点はエリートのテニス選手に限定されており、多種多様のスポーツ種やレベルで起こりうる親の影響や行動を多次的あるいは包括的に把握しているものではない。親の多次的な関わりや行動、あるいはある程度コンテキストを盛り込んだ親の関わりや行動を最終的に定量的に測定できるように、まず、親の影響を受ける子どもや選手にインタビューを行い、親の関わりや行動を質的にまとめたカテゴリーとして把握していく必要があるだろう。その際、多様なスポーツ種やレベルの子ども・選手へのインタビューを通して、スポーツ種やレベルによる親の関わりや行動の違い、およびスポーツ種やレベルを超えた共通項を見出ししていく必要がある。以上、親の関わりや行動へのアプローチや把握のあり方について述べたが、スポーツ指導者の関わりや行動についても勿論同様である。

(2) 親自身の心理的過程

先でみた Kanthers et al. (2008) の研究では、父親や母親からのプレッシャーについて子どもの評定のほうが親自身の評定よりも高く、一方、父親や母親からの支持・援助については親自身の評定が子どもの評定よりも高いことが示されていた。この結果は、親のコミュニケーションに対する子どもの知覚・解釈の問題だけでなく、親が良かれと思ってする振る舞いの背後にある親自身の期待や信念などの個人的要因も大きく関わっていると思われる。松村 (1988) の少年野球と少年剣道に携わる親に対する調査研究では、スポーツに参加する子どもに対して親が、健康・体力増進や技能向上だけでなく精神力や社会性の向上を強く期待していることが報告されている。また、幼稚園・保育所の課外サッカー活動やJサッカースクールに参加する幼児・小学生低学年の親に対して調査を行った金子・東野・村田 (2008) の研究でも、体力増進や技能向上以外に、自律性や協調性といった道徳性に関わる側面の発達を期待している親がかなり多いことを報告している。こうした親の多様なかつ強い期待や信念は、親の実際の行動に対する親自身の解釈・評価をその期待や信念に一致するように歪めさせ、また、子どもが発する言動や非言語的コミュニケーションの正確な理解をも歪曲させてしまう可能性があるだろう。親の

スポーツに対する期待や信念は、親自身が過去にスポーツで経験してきたことや自分の親のスポーツに対する期待や信念に関与してきたことなどに由来するであろう (Horn & Horn, 2007; Kanthers et al., 2008)。また、子どものスポーツ参加を契機に、子どものスポーツ経験やスポーツ運営の形態などを通して変化するということもあるだろう (Dorsch, Smith, & McDonough, 2009; Horn & Horn, 2007)。

Dorsch et al. (2009) は、親が子どもに影響を及ぼすと同時に親の認知・感情・行動にも変化が生じるという「関係性視点 (relational perspective)」にたつて、子どものスポーツ参加に伴う親の変化を質的に検討している。Dorsch et al. は4～6名の親の集中グループをスポーツ種ごとに構成して話し合いによってお互いに刺激し合い、最後に子どものスポーツ参加・経験を通して親自身が変化したことについて尋ねている。また、抽出される概念間のつながりも把握するために Strauss & Corbin (1998) のコーディング手法に基づいて分析を行っている。Dorsch et al. はこうした方法で、子どものスポーツ参加・経験によって親の行動的・認知的・感情的・関係的側面が変化することを見出し、また、その変化を媒介するものとして子どもや親自身の性別、子どもの気質、地域スポーツの状況、スポーツ環境の特徴を見出した。この研究のように、今後、親自身の心理過程や変化をそこに及ぼす多様な要因とともに特定していくことが必要ではないだろうか。スポーツに参加する子どもへの多様なかつ強い期待・信念、またそれを反映した行動には、親自身のどのような心理的過程や歴史・状況、また子どもの特性が関与しているのであろうか。本論冒頭で親や指導者による代理的達成について触れたが、そのような親や指導者の心理的過程を明らかにする意味でも、上記の疑問に応えうる質的アプローチによる検討が今後まずは必要だと思われる。子ども側の視点に立つだけでなく親や指導者側の視点にも立つ研究姿勢こそがまさに社会化研究における関係性の視点であり、スポーツに参加する子どもへの介入・援助においても実質的に重要だと思われる。

5. 大人との関わりはスポーツに参加する子どもの心理的成長をどこまで促すか？

松村（1988）や金子ら（2008）の報告では、スポーツに参加する子どもの親の多くが子どもの体力増進や技能向上だけでなく、子どもの社会性や道徳性といったパーソナリティに関わる側面の発達を強く期待していることが示されていた。パーソナリティとは、多様な状況で一貫して個人の行動、動機づけ、認知に作用する複数の特徴が組織化されたセットである（Ryckman, 2008）。しかし、本論の研究レビューを通してみえてきたことのもう1つは、子どものスポーツ参加やスポーツに対する楽しさや魅力あるいは有能感や内発的動機づけといった心理的側面を大人の影響の帰結とする研究が殆どだということである。近年、スポーツにおける道徳性の発達に関する実証的研究が盛んになっており、そうした研究のレビュー（Weiss, Smith, & Stuntz, 2008）によれば、大人がある選手のスポーツマンらしくない卑劣なパフォーマンスを認めることは子どもがそうしたパフォーマンスを受け入れることにつながることで、「道徳的雰囲気（moral atmosphere）」あるいは行動の正当性に関する集団規範や動機づけ雰囲気の知覚がスポーツ活動における態度や行動傾向に影響することが明らかになっているという。また、スポーツに参加する子どもや選手のスポーツ活動における道徳性を向上させるための介入研究も多くなされており、効果的な介入プログラムも特定されているという。ただし、スポーツ活動における道徳的雰囲気や動機づけ雰囲気がスポーツという文脈を超えて他の文脈での行動にも影響を及ぼしている、あるいは効果的なプログラムによる介入の影響が他の文脈に一般化されるということまでは明らかになっていないようである。このようなスポーツ道徳性研究の動向に鑑みるならば、子どものスポーツ活動に携わる親の期待としては様々な場面で発揮される道徳性や社会性といったパーソナリティ次元の特性の発達を望んでいるにも関わらず、これまでの研究ではスポーツ場面に限定された道徳的行動・判断・思考のパターンに対する影響・効果のみが検討されているというのが実情だといえる。

大人の影響や介入プログラムが、様々な場面で

一貫して行動や思考に発揮される子どもや選手のパーソナリティ特性の発達にどのように影響を及ぼすかを明らかにするためには、今後どのようなアプローチが必要であろうか。1つは、縦断研究デザインを組むことかもしれない。パーソナリティは幼少期から徐々に組織化されて成人期を過ぎてもある程度の変化を示すと考えられるが、こうした時間的変化をもつパーソナリティ特性を対象とした研究には縦断研究デザインが必要だと思われる。縦断研究デザインによって、子どもの発達年齢や発達段階によって大人の関わりや行動やその効果は質的にも量的にも異なること（Horn & Horn, 2007）を踏まえて検討することができ、また、どのような大人の信念や行動あるいは介入の要素がスポーツ活動以外の他の文脈にも影響を及ぼすのかを特定したりすることも可能になるだろう。

さらには、大人から受ける影響の帰結をパーソナリティ発達とする研究を展開する際に、スポーツ活動を継続しているあるいは過去に参加していた個人の発達のストーリーについて回顧的なインタビューから豊富な記述データを得ることも有効かもしれない。Lauer et al. (2010b) は、9名のテニス選手とその親と指導者それぞれ8名に選手の才能の開花・発達について回顧的なインタビューを行い、集約された3つの異なる発達過程（静穏な発達（smooth development）、困難な発達（difficult development）、混乱した発達（turbulent development））を示した。また、静穏な発達過程を示した選手の親は支持的で選手の才能の発展を推し進めながらも健康的な親子関係を維持しているのに対して、困難な発達や混乱した発達の過程を示した選手の親は選手が勝つことと才能を発展させることにプレッシャーを与えており、特に混乱した発達過程を示した選手においては親子間の葛藤が未解決のままになっていることを見出している。このLauer et al.の研究は選手のある特定のパーソナリティに焦点を当てているわけではないが、方法論上の参考になるだろう。こうした方法を用いることで、子どもや選手の社会性や道徳性の形成や変化に対してどのような親や指導者の関わりや行動がはたらいっているのか、またそこにどのような背景的文脈要素が関わって

いるのかを明らかにすることができるだろう。

6. 結語

本論は、昨今の子どもを取り巻くスポーツ環境の事情に触発されて、スポーツに参加する子どもの心理的発達とそこに及ぼす親や指導者の働きかけに焦点を当てた国内外の研究成果のレビューを試みた。まずレビューにあたり、そうした研究の基盤となる理論、あるいは研究結果の説明の準拠枠となる理論を提示し、各理論における大人の子どものに対する影響にかかわる仮説やその背景となる仮定について概要を示した。そして、各理論の仮説や主張にしたがって既往の研究成果を概覧し、各理論の仮説がおおむね実証されていることを示した。また、背景となる理論を超えて、大人の影響に関する研究成果を総じてみると、大人の肯定的な行動的・認知的側面、またそれを通じて生み出される雰囲気はスポーツに対する子どもの肯定的価値、有能感、楽しさを生み出し、ひいてはそれらが内発的動機づけの源泉となってスポーツの参加や継続を促すという影響過程が存在することが示唆された。しかし一方で、このレビューを通して、これまでの研究の一部が親の知覚・解釈と子どもの知覚・解釈に関連がないことを示しており、両者の知覚・解釈にずれがあることが示唆された。また、これまでの研究が、スポーツ活動に関係する子どもや選手の心理的パターンや行動傾向にのみ焦点を当てており、多様な状況で行動・思考に一貫して現れるパーソナリティ次元にまで及んでいないことを取り上げた。こうした2つの研究上の問題に対して今後の研究の方向性を提示した。今回の論の展開に対して他の観点からレビューしたり問題を指摘したりすることができたことを自戒しつつも、最後に、スポーツにおける親や指導者の影響に関する研究が極めて少ない本邦においてはそうした研究の取り組みが急務であることを確認しておきたい。

謝 辞

本論の完成にあたり、査読いただきました学内の先生、およびに甲南女子大学の梅崎高行先生には貴重な示唆・助言をいただきました。ここにあらためて感謝申し上げます。

引用文献

- Allen, J. B., & Howe, B. (1998). Player ability, coach feedback, and female adolescent athletes' perceived competence and satisfaction. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **20**, 280-299.
- Ames, C. (1992). Achievement goals, motivational climate, and motivational processes. In G. C. Roberts (Ed.), *Motivation in sport and exercise*. Champaign, IL: Human Kinetics. pp. 161-176.
- Amorose, A. J., & Horn, T. S. (2000). Intrinsic motivation: Relationships with collegiate athletes' gender, scholarship status, and perceptions of their coaches' behavior. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **22**, 63-84.
- Amorose, A. J., & Horn, T. S. (2001). Pre- to post-season changes in the intrinsic motivation of the first year college athletes: Relationship with coaching behavior and scholarship status. *Journal of Applied Sport Psychology*, **13**, 355-373.
- Atkinson, J. W. (1957). Motivational determinants of risk taking behavior. *Psychological Review*, **64**, 359-372.
- Averill, P. M., & Power, T. G. (1995). Parental attitudes and children's experiences in soccer: Correlates of effort and enjoyment. *International Journal of Behavioral Development*, **18**, 263-276.
- Babkes, M. L., & Weiss, M. R. (1999). Parental influence on children's cognitive and affective responses to competitive soccer participation. *Pediatric Exercise Science*, **11**, 44-62.
- Barnett, N. P., Smoll, F. L., & Smith, R. E. (1992). Effects of enhancing coach-athlete relationships on youth sport attrition. *The Sport Psychologist*, **6**, 111-127.
- Begel, D. (1999). The dilemma of youth sports. In D. Begel & R. W. Burton (Eds.), *Sport psychiatry: Theory and practice*. New York: W. W. Norton & Company. pp. 93-109.
- Black, S. J., & Weiss, M. R. (1992). The relationship among perceived coaching behaviors, perception of ability, and motivation in competitive age-group swimmers. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **14**, 309-325.

- Bois, J. E., Sarrazin, P. G., Brustad, R. J., Chanal, J. P., & Trouilloud, D. O. (2005). Parents' appraisals, reflected appraisals, and children's self-appraisals of sport competence: A yearlong study. *Journal of Applied Sport Psychology*, **17**, 273-289.
- Bois, J. E., Sarrazin, P. G., Brustad, R. J., Trouilloud, D. O., & Cury, F. (2002). Mothers' expectancies and young adolescents' perceived physical competence: A yearlong study. *Journal of Early Adolescence*, **22**, 384-406.
- Bois, J. E., Sarrazin, P. G., Brustad, R. J., Trouilloud, D. O., & Cury, F. (2005). Elementary schoolchildren's perceived competence and physical activity involvement: The influence of parents' role modeling behaviors and perceptions of their children's competence. *Psychology of Sport and Exercise*, **6**, 381-397.
- Bray, S. R., Martin, K. A., & Widemeyer, W. N. (2000). The relationship between evaluateive concerns and sport competition state anxiety among youth skiers. *Journal of Sport Science*, **18**, 353-361.
- Brustad, R. J. (1988). Affective responses in competitive youth sport: The influence of intrapersonal and socialization factors. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **10**, 307-321.
- Brustad, R. J. (1993). Who will go out and play? Parental and psychological influences on children's attraction to physical activity. *Pediatric Exercise Science*, **5**, 210-223.
- Brustad, R. J. (1996). Attraction to physical activity in urban schoolchildren: Parental socialization and gender influences. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **67**, 316-323.
- Carpenter, P. J., & Coleman, R. (1998). A longitudinal study of elite youth cricketers' commitment. *International Journal of Sport Psychology*, **29**, 195-210.
- Carpenter, P. J., & Scanlan, T. K. (1998). Changes over time in the determinance of sport commitment. *Pediatric Exercise Science*, **10**, 356-365.
- Carpenter, P. J., Scanlan, T. K., Simons, J. P., & Lobel, M. (1993). A test of the Sport Commitment Model using structural equation modeling. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **15**, 119-133.
- Coatsworth, J.D., & Conroy, D.E. (2006). Enhancing the self-esteem of youth swimmers through coach training: Gender and age effects. *Psychology of Sport and Exercise*, **7**, 173-192.
- Cumming, S. P., Smoll, F. L., Smith, R. E., & Grossbard, J. R. (2007). Is winning everything? The relative contributions of motivational climate and won-lost percentage in youth sports. *Journal of Applied Sport Psychology*, **19**, 322-336.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Dempsey, J. M., Kimiecik, J. C., & Horn, T. S. (1993). Parental influence on children's moderate to vigorous physical activity participation: An expectancy-value approach. *Pediatric Exercise Science*, **5**, 151-167.
- Dorsch, T. E., Smith, A. L., & McDonough, M. H. (2009). Parents' perceptions of child-to-parent socialization in organized youth sport. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **31**, 444-468.
- Duda, J. L. (1989) . Relationship between ego and task orientation and the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **11**, 318-335.
- Duda, J. L., & Nicholls, J. G. (1992) . Dimensions of achievement motivation in schoolwork and sport. *Journal of Educational Psychology*, **84**, 290-299.
- Duda, J. L., & Hom, M. (1993). Interdependencies between the perceived and self-reported goal orientations of young athletes and their parents. *Pediatric Exercise Science*, **5**, 234-241.
- Dweck, C. S. (1999). *Self theories: Their role in motivation, personality, and development*. Philadelphia: Psychology Press.
- Ebbeck, V., & Becker, S. L. (1994). Psychosocial predictors of goal orientations in youth soccer. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **65**, 355-362.
- Eccles, J. S., & Harold, R. D. (1991). Gender differences in sport involvement: Applying the Eccles' expectancy-value model. *Journal of Applied Sport Psychology*, **3**, 7-35.

- Eccles, J. S., Wigfield, A. W., & Shiefele, U. (1998). Motivation to succeed. In N. Eisenberg (Ed.) and W. Damon (Series Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3 Social, emotional, and personality development (5th ed.)*. New York: Wiley. pp. 1051-1071.
- Fredricks, J. A., & Eccles, J. S. (2004). Parental influences on youth involvement in sports. In M. R. Weiss (Ed.), *Developmental sport and exercise psychology: A lifespan perspective*. Morgantown, WV: Fitness Information Technology. pp. 145-164.
- Fry, M. D. (2001). The development of motivation in children. In G.C. Roberts (Ed.), *Advances in motivation in sport and exercise*. Champaign, IL: Human Kinetics. pp. 51-78.
- Gould, D., Eklund, R. C., & Jackson, S. A. (1993). Coping strategies used by U.S. Olympic wrestlers. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **64**, 83-93.
- Gould, D., Greenleaf, C., & Krane, V. (2002). The relationship between arousal and athletic performance: current status and future directions. In T. S. Horn (Ed.), *Advances in Sport Psychology*. Champaign, IL: Human Kinetics. pp. 207-280.
- Gould, D., Eklund, R. C., & Jackson, S. A. (1991). 1988 U.S. Olympic wrestling excellence: I. Mental preparation, precompetitive cognition, and affect. *The Sport Psychologist*, **6**, 358-382.
- Gould, D., Jackson, S. A., & Finch, L. (1993). Sources of stress in national champion figure skaters. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, **15**, 134-159.
- Gould, D., & Weinberg, R. (1985). Sources of worry in successful and less successful intercollegiate wrestlers. *Journal of Sport Behavior*, **8**, 115-127.
- Harter, S. (1981). A model of intrinsic mastery motivation in children: Individual differences and developmental change. In W. A. Collins (Ed.), *Minnesota Symposium on Child Psychology (Vol. 14)*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 215-255.
- Harter, S. (1999). *The construction of the self: A developmental perspective*. New York: Guilford.
- Harwood, C., Spray, C. M., & Keegan, R. (2008). Achievement goal theories in sport. In T. S. Horn (Ed.), *Advances in sport psychology (3rd ed.)*. Champaign, IL: Human Kinetics. pp. 157-185.
- Henderlong, J., & Lepper, M. R. (2002). The effects of praise on children's intrinsic motivation: A review and synthesis. *Psychological Bulletin*, **128**, 774-795.
- Hollembeak, J., & Amorose, A. J. (2005). Perceived coaching behaviors and college athlete' intrinsic motivation: A test of self-determination theory. *Journal of Applied Sport Psychology*, **17**, 20-36.
- Horn, T. S. (1985). Coaches' feedback and changes in children's perceptions of their physical competence. *Journal of educational psychology*, **77**, 174-186.
- Horn, T. S. (2008). Coaching effectiveness in the sport domain. In T. S. Horn (Ed.), *Advances in sport psychology (3rd ed.)*. Champaign, IL: Human Kinetics. pp. 239-267.
- Horn, T. S., & Horn, J. L. (2007). Family influences on children's sport and physical activity participation, behavior, and psychosocial responses. In G. Tenenbaum & R. C. Eklund (Eds.), *Handbook of sport psychology (3rd ed.)*. Hoboken, NJ: Wiley. pp. 685-711.
- 金子 勝司・東野 充成・村田 敦郎 (2008). スポーツと子どもの発達に関する研究—子ども向け地域スポーツに対する親の期待感と効用感— 共栄学園短期大学研究紀要, **24**, 91-108.
- Kanters, M. A., Bocarro, J., & Casper, J. M. (2008). Supported or pressured? An examination of agreement among parents and children on parent's role in youth sports. *Journal of Sport Behavior*, **31**, 64-80.
- Kimiecik, J. C., & Horn, T. S. (1998). Parental beliefs and children's moderate-to-vigorous physical activity. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **69**, 163-175.
- Kimiecik, J. C., Horn, T. S., & Shurin, C. S. (1996). Relationships among children's beliefs, perceptions of their parents' beliefs, and their moderate-to-vigorous physical activity. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **67**, 324-336.
- Lauer, L., Gould, D., Roman, N., & Pierce, M. (2010a). Parental behaviors that affect junior tennis player development. *Psychology*

- of Sport and Exercise*, **11**, 487-496.
- Lauer, L., Gould, D., Roman, N., & Pierce, M. (2010b). How parents influence junior tennis players' development: Qualitative narratives. *Journal of Clinical Sport Psychology*, **4**, 69-92.
- Lazarus, R. S. (1966). Psychological stress and the coping process. New York: McGraw-Hill.
- Leff, S. S., & Hoyle, R. H. (1995). Young athletes' perceptions of parental support and pressure. *Journal of Youth and Adolescence*, **24**, 187-203.
- 松村 悦博 (1988). 地域少年スポーツにおける親の期待—少年野球と少年剣道の場合— 日本大学芸術学部紀要, **18**, 109-116.
- McCullagh, P., Matzkanin, K. T., Shaw, S. D., & Maldonado, M. (1993). Motivation for participation in physical activity: A comparison of parent-child perceived competencies and participation motives. *Pediatric Exercise Science*, **5**, 224-233.
- 永井 洋一 (2004). スポーツは「良い子」を育てるか 日本放送出版協会
- 中込 四郎 (2004). アスリートの心理臨床 道和尚院
- 中村 和彦 (2008). 今日の子どもスポーツの問題点を探る 児童心理, **62** (14), 23-28.
- Newton, M., Duda, J. L., & Yin, Z. (2000). Examination of the psychometric properties of the Perceived Motivational Climate in Sport Questionnaire-2 in a sample of female athletes. *Journal of Sport Sciences*, **18**, 275-290.
- Nicholls, J. G. (1989). *The competitive ethos and democratic education*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Papaioannou, A. (1994). Development of a questionnaire to measure achievement orientations in physical education. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **65**, 11-20.
- Patton, M. Q. (1990). *Qualitative evaluation and research methods*. Newberry Park, CA: Sage.
- Pelletier, L. G., Fortier, M. S., Vallerand, R. J., & Briere, N. M. (2001). Associations among perceived autonomy support, forms of self-regulation, and persistence: A prospective study. *Motivation and Emotion*, **25**, 279-306.
- Pelletier, L. G., Fortier, M. S., Vallerand, R. J., Tuson, K. M., Briere, N. M., & Blais, M. R. (1995). Toward a new measure of intrinsic motivation, extrinsic motivation, and amotivation in sports: The sport motivation scale (SMS). *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **17**, 35-53.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). An overview of self-determination theory: An organismic-dialectical perspective. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press. pp.3-33.
- Ryckman, R. M. (2008). *Theories of Personality (9th ed.)*. Belmont, CA: Cengage Learning/Wadsworth
- Scanlan, T. K., Babkes, M. L., & Scanlan, L. A. (2005). Participation in sport: A developmental glimpse at emotion. In J. L. Mahoney, R. W. Larson, & J. S. Eccles (Eds.) *Organized activities as contexts of development: Extracurricular activities, after-school and community programs*. Mahwah, NJ: Erlbaum. pp. 275-310.
- Scanlan, T. K., Carpenter, P. J., Lobel, M. J., & Simons, J. P. (1993). Sources of sport enjoyment. *Pediatric Exercise Science*, **5**, 275-285.
- Scanlan, T. K., Carpenter, P. J., Schmidt, G. W., Simons, J. P., & Keeler, B. (1993). An introduction to the sport commitment model. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **15**, 1-15.
- Scanlan, T. K., & Lewthwaite, R. (1984). Social Psychological aspects of competition for youth sport participants: I. Predictors of competitive stress. *Journal of Sport Psychology*, **6**, 208-226.
- Scanlan, T. K., & Lewthwaite, R. (1986). Social Psychological aspects of the competitive sport experience for male youth sport participants: IV. Predictors of enjoyment. *Journal of Sport Psychology*, **8**, 25-35.
- Scanlan, T. K., Ravizza, K., & Stein, G. L. (1989). An in-depth study of former elite figure skaters: I. Introduction to the project. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **11**, 54-64.
- Scanlan, T. K., Simons, J. P., Carpenter, P. J., Schmidt, G. W., Keeler, B. (1993). The sport

- commitment model: Measurement development for the youth-sport domain. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **15**, 16-38.
- Scanlan, T. K., Stein, G. L., & Ravizza, K. (1991). An in-depth study of former elite figure skaters: III. Sources of stress. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **13**, 102-120.
- Seifriz, J.J., Duda, J.L., & Chi, L. (1992). The relationship of perceived motivational climate to intrinsic motivation and beliefs about success in basketball. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **14**, 375-391.
- Smith, R. E. (1986). Toward a cognitive-affective model of burnout. *Journal of Sport Psychology*, **8**, 36-50.
- Smith, R.E., Smoll, F.L., & Barnett, N.P. (1995). Reduction of children's sport performance anxiety through social support and stress-reduction training for coaches. *Journal of Applied Developmental Psychology*, **16**, 125-142.
- Smith, R. E., Smoll, F. L., & Curtis, B. (1978). Coaching behaviors in Little League baseball. In F. L. Smoll & R. E. Smith (Eds.), *Psychological perspectives in youth sports*. Washington, DC: Hemisphere. pp. 173-201.
- Smith, R., Smoll, F., & Hunt, E. (1977). A system for the behavioral assessment of athletic coaches. *Research Quarterly*, **48**, 401-407.
- Smith, R., Zane, N., Smoll, F., & Coppel, D. (1983). Behavioral assessment in youth sports: Coaching behaviors and children's attitudes. *Medicine and Science in Sports and Exercise*, **15**, 208-214.
- Smoll, F. L., Smith, R. E., Barnett, N. P., & Everett, J. J. (1993). Enhancement of children's self-esteem through social support training for youth sport coaches. *Journal of Applied Psychology*, **78**, 602-610.
- Strauss, A. L., & Corbin, J. M. (1998). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 武田 大輔 (2008). 指導と心理臨床の現場から子どものスポーツの可能性を問う 児童心理, **62** (14), 91-95.
- 武田 大輔・中込 四郎 (2003). 子どもに対する親の行動に伴うメッセージと競技における子どもの認知・情動的態度との関係：ジュニアサッカー選手を対象として 体育学研究, **48**, 421-438.
- Vallerand, R. J. (1983). The effect of differential amounts of positive verbal feedback on the intrinsic motivation of male hockey players. *Journal of Sport Psychology*, **5**, 100-107.
- Vallerand, R. J., & Reid, G. (1984). On the causal effects of perceived competence on intrinsic motivation: A test of cognitive evaluation theory. *Journal of Sport Psychology*, **6**, 94-102.
- Weiss, M. R., & Amorose, A. J. (2008). Motivational orientations and sport behavior. In T. S. Horn (Ed.), *Advances in sport psychology* (3rd ed.). Champaign, IL: Human Kinetics. pp. 115-155.
- Weiss, M. R., & Fretwell, S. D. (2005). The parent-coach/child-athlete relationship in youth sport: Cordial, contentious, or conundrum? *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **76**, 286-305.
- Weiss, M. R., Kimmel, L. A., & Smith, A. L. (2001). Determinants of sport commitment among junior tennis players: Enjoyment as a mediating variable. *Pediatric Exercise Science*, **13**, 131-144.
- Weiss, M. R., & Smith, A. L. (1999). Quality of friendships in youth sport: Measurement development and validation. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, **21**, 145-166.
- Weiss, M. R., & Smith, A. L. (2002). Friendship quality in youth sport: Relationship to age, gender, and motivation variables. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, **24**, 420-437.
- Weiss, M. R., Smith, A. L., & Stuntz, C. P. (2008). Moral development in sport and physical activity. In T. S. Horn (Ed.), *Advances in sport psychology* (3rd ed.). Champaign, IL: Human Kinetics. pp. 187-212.
- Weiss, M. R., Smith, A. L., & Theeboom, M. (1996). "That's what friends are for" : Children's and teenagers' perceptions of peer relationships in the sport domain. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, **18**, 347-379.
- White, S. A. (1996). Goal orientation and perceptions of the motivational climate initiated by parents. *Pediatric Exercise Science*, **8**, 122-129.
- White, S. A., Duda, J. L., & Hart, S. (1992). An exploratory examination of the parent-initiated motivational climate questionnaire.

Perceptual and Motor Skills, **75**, 875-880.

Whitehead, J., & Corbin, C. (1991). Youth fitness testing: The effect of percentile-based evaluative feedback on intrinsic motivation. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **62**, 225-231.

脚注

- 1 Deci & Ryan (1985) は、内発的動機づけを活動そのものに結びつけた本質的な満足や喜びに基づいた行動として定義し、人が内発的に動機づけられる場合、ある活動に自由に参加し享楽の感覚を味わうであろうとしている。こうした内発的動機づけの発生は、スポーツなどの活動に参加やその継続について考える際に重要視されている。
- 2 外的調整とは、スポーツに参加している理由を親がそのように自分に強制しているためだとして外的資源や人物に全面的に結びつけているような状態である。取り入れ的調整とは、スポーツ参加の理由を、スポーツを辞めることで人をがっかりさせるからだとして、行動の主体を自分自身に置くものの、その原因を
- 外的資源や人物に置いているような状態である。それに対して、同一視的調整とは、スポーツを継続することで指導者としての身をたてる道を拓くことができるといった理由でスポーツに参加・継続するような場合であり、スポーツ活動の中に自分なりの価値や利益を見出している状態である。外発的動機づけの中で最も自己決定的な統合的調整とは、競技者としてのアイデンティティが確かなものになるとしてスポーツに参加・継続するような場合で、この場合、スポーツ継続という自分自身の行動からアイデンティティ確立という結果を幾分期待しているという意味では外発的ではあるが、自分自身の行動の理由を自分の価値・目標・願望として取り入れているという点でかなり自己決定的である。
- 3 ここでいうストレスとは Lazarus (1966) によって定義されるもので、ある状況が自分の能力の限度を超えるまたは自分の健康に危機をもたらすものとして知覚・評価することを指して使用している。

(2011.11.30 受稿, 2012.3.6 受理)

Influences of parents and coaches on the psychological development of children participating in sport activity: Past and future trends

Takahiro Hisazaki & Takaaki Ishiyama

This article reviews and evaluates the research evidence regarding the parents' and coach's influences on child psychological development in sport settings. First, we presented the theories relevant to the effect of parents' or coach's behaviors and beliefs on child sport participation and described the hypothetical concepts of each theory. Second, we overviewed and surveyed the findings along the lines of the theories and implicated the existence of a process in which adult positive behavioral and cognitive factors will enhance children's perceptions of sport competence and value that will maintain or enhance their intrinsic motivation stimulating activity choice. Through this review, however, it appeared that parents (and probably also coaches) have incongruent view to those of children with regard to parental (and coach's) behaviors and children's competence. Moreover it was confirmed that past studies had not yet focused on child's personality trait, which consistently influences his or her thought, feeling, and behavior across various situations, but on his or her psychological aspects relevant to sport situation. We finally offered a future direction for these two issues.

Key words: youth sport, adult influence, child's perception, adult-child disagreement, development of child personality